

始まりはX線天文学

X線天文学

X線天文学とは、宇宙からやって来るX線を観測する天文学の一分野です。X線は大気を通り抜けることができません。そのため、ロケットや人工衛星などの飛翔体を用いて観測を行います。

1990年代の初め、私は大阪大学理学部でX線天文学の研究室に入り、進学して修士課程1年生となりました。ちょうど、「あすか」と呼ばれるX線天文衛星が打ち上げられたころのことでした。

同じころ、大阪市立大学の博士課程に入られたMさんという方も、研究室に来られるようになりました。X線天文学の研究は各大学の協力が欠かせません。特に人工衛星の打ち上げや運用は大きなプロジェクトです。宇宙科学研究所が中心となり、全国の大学が分担して、人工衛星に搭載する検出器の開発をして、観測を行います。Mさんは、ほぼ毎日、阪大の研究室の方に来られて研究を行われていました。ですから私にとっては実質的に、同じ研究室の先輩ということになります。

研究室の中での会話は、聞いたことのない言葉や概念が多くて大変でした。先生方が議論している内容も、なかなか理解できません。そんな中、Mさんとは年が近いこともあり、ちょっとしたことで気軽に聞くことができました。かみ砕いて、丁寧に教えてもらったので、非常に助かりました。

また、人工衛星を日々維持して観測するため、運用当番と呼ばれるものがあります。各大学の先生や大学院生が交代で鹿児島島の観測所に出向いて、データを受信、観測スケジュールの送信、衛星の状態の監視等を行います。

運用当番に当たった時に、何を準備すればいいのか。今のようにインターネットもSNSもない時代です。鹿児島島の観測所に行く際の交通機関から何か、事細かに教えてもらいました。



鹿児島島宇宙空間観測所(内之浦)

卒業後

修士課程終了後、私は就職してとある地方都市にいました。天文学とは全く異分野の仕事でしたので、話はここで終わるはずでした。

ところがそれから2年ほど後、博士課程を無事終了されたMさんが、同じ県内にある科学館に職を得て、学芸員として来られることになりました。全くの偶然ですが、旧知の仲であることもあり、気軽に科学館にお邪魔するようになりました。プラネタリウムの機器を詳しく見学させていただいたり、学芸員の仕事について、事細かに伺ったりすることができました。

また、科学の祭典という行事に出展したり、科学館でお話しさせていただく機会をいただいたりしました。

余談ですが、我々の大先輩にあたる方で、大阪市立電気科学館、そして大阪市立科学館に勤めておられた菊岡さんにお会いしたのは、Mさんの結婚式の会場でした。

大阪の科学館で学芸員の募集が行われているという情報を聞いたのも、科学館に出入りしているおかげでした。

再び大阪へ

その後私は運よく、現在の大阪市立科学館に採用いただくこととなります。Mさんと引き続き、いろいろな会合などで頻繁に顔を合わせるようになります。

科学館などの集まりのグループで一緒に活動することとなり、国立天文台を何度も訪問して、全国の科学館や公開天文台の皆さんを集めた情報交換会に関わらせていただいたこともあります。

数年前には大阪で、Mさんの知り合いの先生が収集した非常に綺麗な石のコレクション展を開催いたしました。石の専門家でもない私がこんなことをすることができたのも、もちろんMさんのおかげです。

Mさんの手引きがあったおかげで、私はいろいろなことに関わることができました。

Mさんが亡くなられていたことを知ったのは、6月の下旬のことでした。あまりに現実離れしていて、何の話かよく分かりませんでした。今後も今までと同じく話ができると思っていましたから、残念という言葉では表せない、痛恨の極みです。

私自身、まだこんな思い出話をするつもりはなかったのですが、全国の科学館では各地でそれぞれの思いを持って職員が働いている、そんなことを知っていただきたく、拙い文章を記させていただきました。

江越 航(科学館学芸員)